単純性血管腫のレーザー治療 15 年（追跡調査）

Retrospective study of past 15 years Portwine stains treatment with Laser

児浦純義（生）¹⁾，野村慶子¹⁾，二宮涼子¹⁾，溝口志真子¹⁾，浜田 哲¹⁾，川越リカ¹⁾，野元清子²⁾，森岡康祐²⁾，佐々木健司²⁾

Sumiyoshi Koura, M.D. Keiko Nomura, M.D. Ryoko Ninomiya, M.D.
Shimako Mizoguchi, M.D. Tetu Hamada, M.D. Rika Kawagoe, M.D.
Sugako Nomoto, M.D. Kosuke Morioka, M.D. Kenji Sasaki, M.D.

1) 鹿児島市立病院 皮膚科 2) 鹿児島市立病院 形成外科

1) Department of dermatology, Kagoshima city hospital, Kagoshima city.

2) Department of plastic surgery, Kagoshima city hospital, Kagoshima city.

We have down treatment of portwine stain with the argon laser and the pulsed dye laser for 15 years.

Specially, in this paper we report data concerning anatomical differences of portwine stain in response to treatment with the pulsed dye laser, and state about 10 years elapsed state of argon laser treated portwine stain.

Portwine stains of the head and neck demonstrate difference in response to treatment with dye laser according to their anatomical location.

Centrofacial lesion and lesions involving dermatome V₂ respond less favorable than lesions located else where on the head and neck. Midline lesion respond very favorably.

10 years after argon laser therapy is supposed to give good influence to effect of performed argon laser therapy for portwine stain.

我々は、赤あざ（単純性血管腫）に対して、アルゴンレーザー療法を昭和54年導入し、2年前から色素レーザー療法を実施している。諸家並びに我々の検討から赤あざに対するアルゴンレーザー療法並びに色素レーザー療法の総合的評価（適応と限界）はすでに確立された感があ

りますが、充分検討されていない問題も残されていると考える。今回は我々の治療経験のなかで次の2点について検討した結果を述べる。

- 1) 局在別治療効果の差（特に顔面に関して）
- 2) アルゴンレーザー治療効果に関する予后調査による10年後の状態について

用いた色素レーザー発生装置は日本赤外線工業株式会社製 DO 101 型 (パルス巾 300 μ sec, 波長 590 nm, スポット径 7mm または 5mm) を出力 6 ~ 9 J の範囲で使用した。アルゴンレーザー装置は、米国 Coherent 社製皮膚科用アルゴンレーザーシステム 1000 で照射 spot は直径 1 mm であり、照射出力は 1.0 ~ 1.5 ワット、照射時間は 0.2 秒を標準としている。

治療効果を (A) excellent, (B) good, (C) fair, (D) good の 4 段階評価として、瘢痕、色素沈着等の副作用は減点対象として治療効果を判定した。

今回検討した症例は Dye 224 例, Argon 44 例, Argon + Dye 43 例である。

アンケートによる予後調査の症例として、アルゴン治療後 10 年以上経過例 24 例, Dye 1 年以上のもの 40 例をとりあげた。

結果

(1) まず Dye の年令別有効率について、40 才以上で good 以上の有効率が高く、統計学的検定を行った結果、5 % の危険率で 41 才以上は 40 才以下に対して有効率が有意に高いという成績であった。(図表は省略する)。

(2) Dye の部位別の効果について、頭頸部が上肢、下肢、躯幹等に対してあきらかに高い有効率を示した。

(3) 顔面を三叉神経 I 枝 (V_1), II 枝 (V_2), III 枝 (V_3) の各支配領域にわけ、頸部 C 領域とともに有効率を比較検討した結果は V_1 , V_1 正中, C が有効率が高く 80 % 以上を示し, V_3 がそれにつづく成績であり, V_2 領域が最も有効率が低く示された。 V_2 と V_2 以外の 2 群にわけて統計学的検定を行うと、5 % の危険率で, V_2

領域群で有効率が有意に低く示された。

(4) 同じく、Dye の色別有効率について、赤、紫、ピンクの順に有効率が高かった。

(5) Dye, Argon 並びに Dye と Argon 併用の三者間の有効率を比較すると Argon 34%, Dye 72%, 併用 77% であった。

(6) 副作用の発現頻度を Argon の場合についてみると、scar (瘢痕) は色別ではピンク、年令別では 40 才台、部位別では V_2 に多く出現しており、色素沈着と脱色素沈着については色別では紫、年令は 30 才台、部位は下肢と V_2 に多く出現している結果であった。

(7) 予後調査を実施した。Argon については特に 10 年以上経過している症例もふくめて検討した結果、10 年にわたる時間的経過がよい効果をもたらし、副作用の問題もふくめて、改善へ大きく貢献していると考えてよい成績がえられた。

(図表等は省略した)